

審査の結果の要旨

氏名 竹山 聖

18世紀にカントが提唱した理性のモデルに対して、20世紀の度重なる戦争はその有効性に疑義を唱えた。こうした事態に対しフロイトは、「死の欲望」という概念を提示し、非合理的な思考を顕在化させ、無意識の重要性を指摘した。この思考を継承したのがラカンで、彼は言語化されない、いわば言語の余白に現れる無意識の構図に着目し、論を展開した。建築の設計も必ずしも合理的・理性的な判断の下に行われているわけではない。本論文は、建築設計における無意識の思考プロセスを対象に、古代ギリシャ哲学から現代フランス思想に至るまでの広範な哲学思想に論及しつつ、筆者のいう「建築的瞬間」がどのような情動に基づいて喚起されるかについて論考したものである。

論文は、序論とⅠ～Ⅳの部分から成るが、その要旨は次の通りである。

序論

本論文の課題について述べた後に、建築的思考がいかに関ガージュの構造をもつかについて、ロゴス、エロス、タナトスという、本論の基調となる概念を用いて説明している。

Ⅰ. エロスの位相

前提となる主要な概念の説明と、論旨の展開の方向性に関する解説である。フロイトのエロスと「文化」の関係性について考察し、エロスに対する障害として立ちはだかる「文化」が、結果的にエロスの強度を高めていることに着目し、「文化」は、「自然に対する制御システム」であるのと同時に、「人間関係の調整システム」であるとしている。これらは、「物と人の関係」と「人と人の関係」の在り方を示し、「支配の知」と「分配の知」として社会化されるが、この関係性は正に、建築に要請されている機能である。生への欲動であるエロスは、同時に死への欲動であるタナトスを相補的に伴うが、前者が個としての充足を求めるのに対して、後者は共同体としてのそれを希求している。この関係性は、エロス形、タナトス形式と置き換えると、建築という行為に転換される。

Ⅱ. 可能世界の構想

建築という行為が、どのような世界観の下に動機づけられ、展開しているかについての考察である。人間はその進化の過程において道具や言語を獲得し、「圧縮・保存・輸送」の技術を確立したが、その結果として、世界は所与のものではなく、可変的なものであるとの認識に至った。建築という行為は、身体を世界へ拡張する行為と位置づけられるが、重要なのは、事物と事物の関係性、すなわちロゴスである。ロゴスの存在により、エロスとタナトスを動因とする設計行為を統御することが可能になる。

Ⅲ. 場の思考

外部との関係性、とりわけ、自然が建築のメタフォアになる場合が多いが、境界の形

態を規定する閾により空間は活性化される。建築を訪れる自然や人間の諸相に対し、抵抗する閾の形式を決定することにより、設計主体の意図が機能する。

IV. 思考の可能性としての建築

ハイデガーのロゴスと、フロイトのエロスとの対比である。前者が、宇宙と人間の間働く法則で、全体から個に向かう統合であるのに対し、後者は、メタフォア、メトニミーとして個から全体に向かう発散になる。ロゴスは超越を、エロスは内在を志向するが、建築的志向はエロスとロゴスの相克によりダイナミズムを獲得する。個のロゴスが倫理を生み、それがエロスの発露となり、やがてタナトスに収斂する。バベルの塔は、建築に対して時間的な凍結を挑んだが、＜唯一の建築＞の失敗がくさまざまな建築＞の地平を切り開いた。ダリダは「建築的瞬間」という用語で建築という思考の可能性について言及しているが、それは正にロゴスとエロスの相克において、思考の回路が切り替わる瞬間である。

V. 空間加工のイメージ

実際の設計過程においてどのように思考が変遷したかという臨床例である。＜REFRECTION HOUSE／安城のスタジオ＞は2000年に完成した住宅であるが、その設計過程においてどのように思考が展開し、また変化していったかをスケッチから辿り、思考の転換点から＜建築的瞬間＞の訪れについて検証したものである。

建築的欲望 Λ を、

$$\Lambda = \frac{\varepsilon \diamond \tau}{\lambda}$$

ε はエロス、 τ はタナトス、 λ はロゴスで、
 \diamond はラカンのポワンソン

と定義すると、＜建築的瞬間＞はこの逆数になる。建築的瞬間は生の流動と死の平面とを合わせ鏡にしたようなもので、そこでは相対立する諸概念が同時に映し出されるが、この空間加工を深化させることにより建築的思考が次第に空間化される。

以上要するに、本論文は、建築という行為が人間の深層心理においてどのような動機に基づき発動し、それがどのような思考回路を経て実際の建築物になってゆくのかについての考察で、そこでは、古代ギリシャから現代に至るまでの形而上学的な諸概念が援用され、＜建築的瞬間＞がどのようなメカニズムに基づく思考であるのかが明らかにされている。

これは、森田慶一、増田友也、加藤邦男氏らが展開してきた、建築とは何かを問う建築論・設計論に対して、設計行為そのものを直接的に問いかける新たな設計論を開示するものである。筆者の提示した、ロゴス、エロス、タナトスをキーワードとする情動論的設計論は、思考過程における本質を捉える試みとして極めてユニークで、設計という行為の断面を鮮やかに再現したものである。これは建築計画学の分野に新たな方法論を提示するもので、その意義は大きいと判断される。

よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。